


在外研究員研究報告書

2021年 8月 6日 受付

所 属	神学部		氏 名	中野泰治	
職 名	准教授				
研究課題名	クエーカーの合議形式の性質と民主制度への応用可能性				
研究期間	2020年 3月 5日 ~ 2021年 2月 22日				
滞在期間 ・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先		
	2020. 3. 5~10. 29 2020. 10. 30~2021. 2. 22	英国 日本	The University of Birmingham Woodbooke Quaker Study Centre 同志社大学		
研 究 費	253.4 万円		研究成果の概要	別記 4,000字程度	
発    表	題 目 名	発表学術誌名Vol. No.		発行年月日	
	「合意形成および組織形成の基盤理論としての完全論—自由主義クエーカー思想の諸類型と合意形成論・組織論の問題点—」	『基督教研究』、第83-1号		2021年6月	
	著 書 名	発 行 所 名		発行年月日	
	演 題	講演学会名		講演年月日	

## 在外研究成果報告書

同志社大学神学部准教授 中野泰治

2020年度に行った外部資金（学術研究助成基金助成金：国際共同研究強化）による在外研究（在外研究における研究課題は、「合意形成および社会形成の基盤理論としての完全論」（基盤C：2016～2020年）を基盤課題として設定した「クエーカーの合議形式の性質と民主制度への応用可能性」である）は、英国のバーミンガム大学大学院哲学・神学・神学研究科、および大学のすぐ近くにあるクエーカーの研修機関である Woodbrooke Quaker Study Centre で、バーミンガム大学名誉教授 Ben Pink Dandelion 氏を共同研究者として行う予定であった。本在外研究においては、クエーカー（フレンド派）の合議形式について全英規模で大規模なアンケート調査、およびインタビュー調査を行い、そこから得たデータを用いて、神学的視点からのみならず、(数理) 社会学的視点から研究することを目的としていた。つまり、質的研究ならびに量的研究も視野に入れたものであった。しかし、2020年3月4日に渡英し、14日間の自宅隔離の後のすぐに、3月23日夜、全国的なロックダウンがボリス・ジョンソン首相により宣言された。その結果、客員研究員として受け入れ先であったバーミンガム大学は閉鎖され、大学の連携機関である Woodbooke Quaker Study Centre も閉鎖された。コロナ関連のニュースを見て、ロックダウンが長期化することを見込んで（第一のロックダウンが解除されたのは、7月初旬である。大学は再開されたが、Woodbrooke Quaker Study Centre は、10月に帰国するまで閉鎖されたままであった）、実地調査は取りやめることにした。代わりに、オンラインで入手できる文献や資料に基づく理論的研究に切り替えた。つまり、クエーカーの合議形式の理論的側面（クエーカーの合議形式の理論的分析と民主制への応用可能性）について研究する方向へ課題を変更したのである。しかしながら、クエーカーの集会、および合議集会はオンラインで行われていたため、バーミンガムのセリーオーク集会（バーミンガムにおけるクエーカーの中心的集会）には毎週参加して、陪席の許可の下、合議の実際の運用について観察し、研究のためだけに使用するという条件で合意を得て集会の様子をビデオに収めて、彼らの合議の仕方について学んだ。

伝統的なクエーカーの合議形式は、多数決や討論の力によってではなく、沈黙の内に祈りを合わせ、最後の最後まで異質な意見に開かれつつ、話し合い、集会としての最終一致（Unity）を目指すというものである。この合議における態度（異質なものへの開け）は、イエス・キリストの命、すなわちイエス・キリストが示された隣人愛（そして、その究極の形である「敵対者・異質なものへの愛」）に基づくものである。またクエーカーの教会論

(組織論)も、各人に与えられた賜物(能力)に基づいて各人が教会(集会)での役割を担い、各人へのキリスト教的相互愛の実現の場として機能することを基盤とするものである。現代のクエーカーは、18世紀初頭の第二次信仰復興運動の影響を受けて、三つの伝統に分かれているが(米国の場合、自由主義クエーカー、福音派クエーカー、保守派クエーカーの三つの伝統)、文書の解読のなかで、それぞれの伝統における合議形式にはあまり相違が存在せず、約360年に亘って同一の形式を保っていることが分かった。また、こうしたクエーカーの文献調査の過程で、合議における一致に至るまでのストーリー解釈が、各伝統において多様であることも判明した。これらの点が第一の成果であり、2021年6月発行の『基督教研究』に論文(論文タイトルは、「合意形成および組織形成の基盤理論としての完全論—自由主義クエーカー思想の諸類型と合意形成論・組織論の問題点—」、『基督教研究』、第83-1号、2021年:1-18頁)としてまとめた。なお本在外研究では、特に英国のクエーカー(英国のクエーカーは、すべて自由主義クエーカーである)に焦点を当てているため、自由主義クエーカーの合議形式の特徴とその解釈の多様性について分析をさらに進めた。英国のクエーカーは、主として少数のクリスチャン・クエーカー(キリスト教徒であるクエーカー)と多数のユニバーサリスト(どの宗教でも救いに至ることができる主張する普遍救済論者)とによって構成されている。前者の合議形式の解釈は上述のキリスト教的伝統に沿ったものであるが、後者の解釈は19世紀後半から20世紀前半に流行した新ヘーゲル主義の影響を強く受けた、「自己から始まり大いなる自己との一致」で終わる自己充足的なもの(つまり、キリスト教的伝統から離れ、19世紀のカルヴィニズムに対する反発から生まれたニューソート[New Thought]に似た自己実現論的解釈)であるが、そうした解釈の相違は実際の合議の場においては大きな影響をあたえないことも判明した。というのは、合議の場では、前者においては異質な意見に開かれることがキリストの「敵対者への愛の教え」に適うものとして実践されるが、後者では啓蒙主義以来の近代文化そのものに見いだされる寛容の精神から多様性を認める態度が根付いているからである。実際のところ、オンライン上の合議の場で、そうした相違が対立で現れることを目撃することはなかった。これが第二の成果である。

さらに、自由主義クエーカーの合議形式は、20世紀初頭の政治・社会思想家であるメアリー・パーカー・フォレット(Mary Parker Follett, 1868-1933年)の意思決定論、組織論と共通点を多く持つことも分かった。そしてまた、クエーカー自身もフォレットの意思決定論および組織論を意識していたことが明らかとなった。これが第三の新たな成果であるが、現時点(科研費の研究は継続中)では、まだフォレットの理論的分析が完全に行えておらず、来年度(2021年度)の課題として研究を行う予定である。

なお、クエーカーの研修機関であるWoodbrooke Quaker Study Centreの再開が全くの未定であったこと(この機関に、共同研究者であるBen Pink Dandelion氏は所属。バーミンガム大学の名誉教授でもある)、コロナの第二波・第三波が迫ってきていたため、計画通りに帰国が出来ない可能性が出てきたことから、2020年の9月の時点で神学部長と相談

のうえで在外研究は取りやめ、2020年10月30日の便で日本、東京成田に帰国した。14日間のホテルでの隔離生活後は、国内研究員の身分に切り替え、同志社大学においてクエーカーの合議形式とその民主主義への応用可能性に関する研究を継続した。

2021年の現時点でフォレットの理論の特性については、ある程度分析済みであるため、現時点で残された課題は、(1) フォレットの理論を現代の合意形成論や組織論のなかで、数理モデルを用いながら位置づけること、(2) クエーカー自身によって参照されるフォレットの理論とクエーカーの合議形式を理論的整合性をもって結びつけることで、クエーカーの合議形式の特徴を分析することの二つである。ただし、フォレットの理論の数理的分析については先行研究がないため、数理的解析には時間がかかることが予想される。その場合には、数理的分析は一旦保留し、合意形成論・意思決定論で世界的な指導的立場にあるハーバード大学のローレンス・サスキンド教授（連絡済み）の意思決定論・合意形成論をもとに、フォレットの意思決定論や合意形成論、およびクエーカーの合意形式について分析し、英米のみならず、日本の民主制における応用可能性について検討する。ちなみに、イギリスの政治学者アレクサンダー・ダンロップ・リンゼイ（Alexander Dunlop Lindsay, 1879-1952年）によれば、英米の民主主義の原点は、17世紀半ばのピューリタニズム、特に急進派ピューリタンであるクエーカーの合議形式にあると見なされている。その意味で、英米の民主主義をひな形にした日本の民主制における応用可能性を考察することには一定の意義があると考えられる。

上述のように、現時点で残された課題は、(1) フォレットの理論を現代の合意形成論や組織論のなかで、数理的モデルを用いて位置づけること、(2) クエーカー自身によって参照されるフォレットの理論とクエーカーの合議形式を整合性をもって結びつけることで、クエーカーの合議形式の分析することの二つである。(1)の課題については、現代の合意形成論と組織論について概観し、それらを用いて、フォレットの理論の特性について明らかにする。(2)の課題については、クエーカー自身が自分たちの合議形式がキリスト教的「愛」という概念においてのみ、フォレットの理論と異なると述べているが、クエーカーのいう愛の意味について把握したうえで、フォレットとクエーカーの合議理論の特性を明らかにする予定である。そして、もう一つの課題（最終課題）として、(3) クエーカーの合議形式の民主性への応用可能性について現代の熟議・討議民主主義論などの成果（クエーカーの合議では異質な意見に最後まで開かれる話し合いが大切とされる）を参照しながら、考察する予定である。